



唐獅子

先週、昭和薬科大学付属高校での「センター試験先取の特別講座」にお招きいただき、講義をさせていただいた。こうして、私にとつて縁の深い沖縄で、しかも、将来を担う学生の皆さんに話が出来るとは、とてもありがたいことだと思つている。

さて、私は現在、古文の講師をしているのだが、学生からだけでなく、大人の方々からも、「古文は昔手でしたよ。暗記科目だし」などという古文敬遠の声をよく耳にする。

「はたして古文の学習とは一体何なのだろうか?」「どうして古文を勉強するのだろうか?」「こうした疑問に対して、私なりの意見を少々述べさせていだだこうと思つた。

確かに古文は日常会話で必要とするわけでもなく、知らなくて困るわけでもないのだろう。しかし、普段使っている日本語に誤用があり、それを指摘された時に、「どうして間違ひなのだろうか?」と考えるはずだが、もしも正しきの基準となるものがなければ思考は空回りをすることになる。つまり、日本語が使われてきた中で、言葉の使い方「ルール」をもつて一度確認する作業が必要なのである。言葉は生き物であり、

鳥光 宏

古文学習について思うこと

時代とともに変化してゆく。しかし、変化しながらも、その民族・地域固有の表現方法があり、互いに認識し合うから言葉が脈々と受け継がれ、通じ合っているわけである。つまり、目には見えぬが、根底・土合がしっかりと根を張っていないければ、その言語は崩れ去ってしまうのだ。

紀貫之は古今和歌集仮名序の中で、和歌としての言葉が生まれる根底について、「人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」と記している。「心の種」が発芽して親の遺伝子を受け継ぎ、確実に成長するために必要なのが言葉のルールである。「文法」なのである。では、そのルールはいつからどのような変遷をたどつて現代の日本語に至ったのか。それを知つていく作業が古文学習にはあると私は思うのだ。

もちろん、文学としての味わいを読み解くことも必要であろう。だが、そのためにはやはり言葉の使い方を知り、正しく読むという作業は欠かせない。「基礎力・根底力」というものが、ここにおいても必要なのは、普段の生活に似てはいないだろうか。(講師・作家)